

雅子が倉沢の持ち込んだ原稿を読んだのは、三日後の土曜日の放課後であった。以下はその全文である。

私はここ十数年来、ロシア人墓地に眠る九十八名の将兵の正確な氏名や略歴、出身地、それに病床の様子などの調査に取り組んでいる。この調査がやがて故国の遺族の発見につながればという願いからである。

しかし、日本国内だけの調査には限界があった。調査の正確さと信頼性を高めるためには、どうしても旧ロシア軍が作成したロシア将兵捕虜の死没者名簿を入手する必要がある。私は何度も関係機関に協力を依頼したが、色よい返事のないままに月日が流れていた。

そんな時、私に思いがけない朗報がもたらされた。昨年春、モスクワ大学にこの上ない協力者が現れたのである。ビタリー・カザノフという歴史学者である。



挿絵 (R. Watanabe)

カザノフは私の要請をこころよく受け入れ、モスクワにある「ロシア帝国外務政策公文書保管所」で綿密な調査をし、松山収容所で死没した将兵の氏名、父方の姓、階級、出身地、死亡時の年令、入隊前の職業などを私のもとへ報せてきた。

ところがである。カザノフの報告書には九十九名の氏名があったのである。

私はさっそく、ロシア人墓地の埋葬者名簿とカザノフの報告書を照合してみた。そして、「アレキセイエフ・ソローキン」という将校の氏名が、松山の名簿に存在しないことが判明した。私はロシア人墓地に出かけ、九十八基の北向きの墓面に刻まれたカタカナの氏名を何度となく探したが、やはりソローキンの名前はなかった。念のため、泉大津と長崎の露人墓地にも照会してみたが、やはりソローキンは見つからない。モスクワのまちがいなのだろうか。そこで再度、ソローキンについてカザノフに再調査を依頼した。すると、次の回答があった。「アレキセイエフ・ユーゲビッチ・ソローキンは、ペテルブルク海軍兵学校を首席で卒業した海軍士官で階級は少尉である。一九〇四年（明治三七）六月四日深夜、極秘の命令を受け、日本の連合艦隊が包囲する旅順港を運送船で脱出しウラジオストックへ向かったが、巡洋艦八雲やくもに捕捉された。松山へ移送されたが同年十月十日、松山収容所で結核に肺炎を併発して死亡した。享年二

十二歳、出身地について調査中である」

私は県庁に保存されている旧日本赤十字社のロシア傷病兵看護記録や病床日誌をあたってみ

た。さらに県警本部で、松山収容所近辺の^{けいら}警邏記録を調べた。しかしどこにもソローキンの存在を示す文字や記述が見当たらないのである。思い余って、私は上京した。外務省と国会図書館を回り、最後に防衛庁の戦史資料室で日露戦争関係の書籍に目をおし、資料を精査した。だが、やはりソローキンの名前はもとより、かれに該当した人物を探しだすことができなかつたのである。

カザノフの報告を何度も検討した結果、ソローキンは実在の人物であり、また、かれが日本で偽名を使ったとは考えられなかった。だとすると何らかの理由で、かれの名やかれに関する記録が日本国内の一切の書類や文書から抹殺されていることになる。しかしそのようなことが現実^{もんもん}にありうるのだろうか。

ソローキンを追究する手立ても尽き、私はしばらく悶々とした日々を松山で過ごしていた。



挿絵 (M. Horibe)